

## 秦漢南北朝璽印の断代研究

### —封泥の類型分類の断代意義も併せて—

上海博物館 孫慰祖

\*〔 〕＝訳出に際して補った箇所。

- 一 断代研究の必要性と研究史
  - 二 断代基準の設立—考古学的発見と文献考証
  - 三 文字の風格と形態類型の抽出と断代序列の構築
  - 四 秦漢封泥の分期断代—文字の風格と形態類型研究
- おわりに

#### 一 断代〔編年〕研究の必要性と研究史

##### 1. 正確な断代は史料としての前提

中国璽印三千年の歴史は、制度史、文字の進展変化の歴史、篆刻芸術史の研究に関わるものである。戦国時期以来の官印は、歴代の官制・行政地理・民族関係等の面において真の史料を保存するものである。璽印本体の研究であっても、璽印の文字史料を用いて歴史研究の証拠とするものであっても、正確な断代を前提とすることが必要である。証拠が偽であれば、結論も必ず偽なのである。

A. 官印の断代から史料の適用の正確さを見る—「胥浦侯印」を例として

断代の違いと誤り 考釈の附会 —「浙江都水」を例として

B. 印文の書体の自然な進化発展の不可逆性から見る「親魏倭王」印の真贋

##### 2. 研究史の簡単な回顧

宋代王順伯『漢晋印章図譜』から、明代顧氏『集古印譜』や晩清時期の古璽印譜録まで、璽印の総称を「秦漢魏晋印」の形式とすることを踏襲するが、明の朱簡は『印章要論』で「先秦以上印」があることを指摘している。古璽と「秦漢魏晋印」の順序については〔印〕譜や〔著〕録において徐々に具体的に表現されるようになった。〔瞿中溶〕『集古官印考證』は官印史料を見分けている著作でもあり、同時に文献を利用して歴代の官印に断代を進めることを始めたものでもある。ただ、客観的な条件に欠けていて、文字や形態の研究におろそかな部分があるため、断代の結論は正確とは言えないものとなっている。明清時代、古印の断代は、基本的には先秦・漢魏晋・隋唐宋元官印の三つの部分からなっていた。しかし歴代王朝の印章への具体的な断代の基準について、その認知はなおあまりはつきりしないものだった。例えば「漢印」と「宋元印」は内包もはつきりせず、外延も広範囲に及ぶ一つ概念となっていたのである。

この五十年来、考古学的発掘によって出土した璽印は、伝世品の断代に形態学研究の基準を示すものとなっている。羅福頤氏は1980年代以前に著書『古璽印概論』〔1981年〕において字体・鈕式・材料・印文のそれぞれの要素から断代を行い、文献を調査探索するとともに考古学的に発掘された璽印

を証拠とすることを提唱している。同著『秦漢南北朝官印徴存』〔1987年〕では、戦国秦漢南北朝璽印の進化発展の基本的な輪郭が簡単に描写され、修正が必要な部分はおお多く存在してはいるが、後続の研究に重要な資料的基礎を定めたものとなっている。

## 二 断代標準の確立—考古学的発見と文献考証

1. 魏晋亀鈕形態類型の変化の順序とその推定
2. 職官制度・官印典制の変革を断代の根拠とする
3. 考古学的発見による出土物を推定の根拠とする

## 三 文字の風格と形態類型の抽出と断代の順序の構築

1. 「印群」現象：印文の風格群の国別判断
2. 秦・前漢・後漢・三国・西晋・東晋官印瓦鈕の形態における変化発展の順序
3. 戦国秦漢南北朝璽印（印文）の工芸的变化

戦国時代の官私印文字は基本的に鑄造されたものである。秦国及び秦代の印文には鑿刻〔刻み込まれたもの〕が徐々に多くなるが、官印は依然として一部に鑄造が採用されている。前漢・後漢、三国、西晋の官私印は基本的には鑄文であるが、金銀印には鑿刻された文字が採用されている。この工芸的な選択は、印文の規格化への要求にも関わるが、根本においては製作工具の材料による制約を受けたものである。

印信の権威的な性格を具体的に表現し、社会における美の観点からの要求を満たすには、当時の鑿刻工具はなおその目標を実現できるものではなかった。漢代の銅製官私印の印文は鑄造が主へと転じ、それは西晋でも継続している。

前漢中期以降、カーボンスチール（炭素鋼）による工具によって、硬度が比較的低い金・銀を材料とする場合には理想的な効果が得られるようになっていたため、金・銀印は鑿刻工芸が用いられた。

秦から南北朝へ、鑿刻工具と技法は次第に変化発展していく。南北朝時期には製鋼技術が更なる発展を得ると同時に、官印製作の規範も徐々に弛緩するようになり、印文を直接鑿刻することは南北朝時代の官印においては普遍的な現象となっている。

## 四 秦漢封泥の分期断代—文字の風格と形態類型研究

### 1. 印章の文字と封泥の文字の同一性

印章の文字と封泥の文字には同一性が存在する。この二つは断代研究において整合させなければならない。

各時代の官印・封泥・銅器銘文の基準品の中から常用字を抽出し、印鈕・封泥の形態を結びつけたものを補助として断代の推定を作り出す。

### 2. 封泥の形態的分類類型と断代の意義

秦から後漢へ、封泥の形態にはいくつもの変化が出現する。これまでの研究では文字史料に重心が置かれ、形態の点は注目されて来なかった。封泥とそれに関係する封検を追求することから、封泥の形態がこの封検に対応性を持つことが発見された。

封泥の形態的变化は、総体的には封検と封泥を使用する方法の絶えざる改良の結果である。簡便なものから周密なものへ、封泥を容易に脱落させないためのものである。

実用器具の改善は、新旧交代の過程である。封検形式の交代にも、その前後に延伸がある。封泥形態の分類類型についての断代の価値は、主な流行の時期が示されることにある。また同時に文字の風格とも関係させて、かなり正確な相対的年代の判断を示すことが可能である。

封泥の形態変化には時間の序列による特徴があり、この時間的な序列は印文の風格の前後関係と正しく相関性を呈している。すなわち秦から後漢末へ、年代に伴う推移—形態は順番にA・B・Cの三つの形で変化していく。同時に文字の形は丸みを持つ筆画から真っ直ぐな筆画へゆっくりと転換していく。筆画は丁寧なものから徐々に粗いものとなる。文字部分における構成は篆書から隸書となる。印面は小さいもの(約2.2 cm)から徐々に大きくなる(約2.4 cm)。

## おわりに

歴代の璽印は、特定の時期における社会政治・経済・文化・物質条件による産物である。古璽印の断代は多くの関連する専門学科、例えば古文字、字体書風の変化発展、歴代官制と印制・歴史地理・歴代の鑄造工芸等に関わるもので、そのいずれもが断代研究の学術的基礎となっている。

この数十年の探索を経て、璽印の断代の方法とその道のりはかなり明確なものとなっている。過去のおおまかな断代における曖昧な部分や空白は次第に明らかではっきりしたものとなってきた。中国璽印の形態における発展変化の順序は基本的にはすでに形成されているのである。

東晋十六国から南北朝、即ち紀元四世紀から六世紀、これは秦漢印系に形態・文字の分化や緩みが現れる時期であり、南北が分治され、かつ王朝交替が短期間に繰り返されているため、この時期の各朝(国)の印章については、断代や国の分別には、なお曖昧な部分が存在し、さらに具体的に掘り下げた研究を待たなければならない。